

# かささぎ通信 第129号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2023年 10月 13日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」



「雪こんこんお寺の柿の木」表紙、著者：森三郎、絵：井口文秀（国立国会図書館デジタルコレクション、インターネット公開）

二〇二三年九月の「森三郎の作品を読む会」では、「雪こんこんお寺の柿の木」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943.12 泰光堂の表題作)と「だゝつ子」(『赤い鳥』一九三三年八月号所収作)を読みました。

『雪こんこんお寺の柿の木』は一九四三年十二月発行の短編集です。全二十話が収録されています。今回読んだ表題作「雪こんこんお寺の柿の木」は、刈谷市教育委員会編(1995年)『森三郎童話選集 かささぎ物語』にも載っています。また森三郎童話紙芝居にした作品なので、会では何回も読み合わせてきました(参照「かささぎ通信」第80号)。

今回読んでも作品の明るさ、リズム感が心地よいという感想が参加者の多くの声でした。柿の木に登っていたお寺の小坊主は、大名行列の馬の背に落ちてそのまま若君の弟君としてお城で暮らしていました。しかし何不自由ないように見えるお城での生活から、小坊主は再びお寺に戻ってきます。そして和尚さんに「和尚さん、柿の木が立ってますよ」「柿の木に雀がきてますよ」「柿の木はやっぱり柿の木ですね」と畳みかけのように言います。和尚さんは当たり前のことをさも大発見のように言う小坊主のことがおかしくって、うれしくってなりません。小坊主がお寺に戻ってきたことが嬉しいだけではありません。何気ない言葉に和尚さんは小坊主の成長を感じ取ったからだろうという指摘もありました。保育園でこの「雪こんこんお寺の柿の木」の紙芝居をすると、最後の小坊主と和尚さんの掛け合いは理解出来ない子どもたちも、若君を乗せ

たお駕籠の上に鶯が糞を落とすと大笑いします。お駕籠、馬、若君の頭と三回「ピーヒョロロ」ポタリ」の繰り返しの後に、小坊主が馬の背中に落ちると筋立ての面白さは子どもたちが飛び付いてきます。

小坊主の弟君が話すお城の人物の名前は「お小姓の十三七彌(ななや)と若井年之助」など語呂合わせの名前で、作者の森三郎が楽しんでいる様子が分かります。乳母の「重の井」と馬の指南役「伊達与作」、奥方「調姫」の名前はいずれも人形浄瑠璃『恋女房染分手綱(そめわけたづな)』に登場する名前です。兄の森銑三が『帝國民』の編集をしていた時代に、「芝居物語」として「染分手綱」(筆名・刈谷新三郎、『帝國民』一九二〇年一月号)を発表したことがあります。馬子の三吉が母の重の井に再会する話なので、大名行列の馬の上に小坊主が落ちる場面から始まる「雪こんこんお寺の柿の木」の構成のヒントになったかと思われま

す。ところで森三郎は『赤い鳥』一九三二年六月号から三三年三月号までに四十五作(連載二回、全四十七回)を発表していますが、それらは日本の古典や外国作品の翻案が中心でした。しかし三三年一月号から、時代は近世末期に設定し、十代初期の子どもを主人公にした作品群が始まります。その後三月号所収の「だゝつ子」は初めて現実的な設定・題材を取り上げた作品です。「読む会」では『赤い鳥』の森三郎作品の特徴として、「だゝつ子」以降に続く子どもたちの日常生活での心理を描いた作品群をもう一度読み直そうということになりました。

「だゝつ子」は、入り江に沿った小さな田舎町、呉服屋の番頭をしていたお父さん、お城山の一部を崩して建てた校舎の様子、呉服屋の屋号など、三郎の育った刈谷の町を想起させる設定の話です。当時はまだ珍しい十六色のクレイヨン(『赤い鳥』の自由画応募の注意に「毛筆・ペン・鉛筆」の後「クレイヨン」が出てくるのは一九二五年八月号から)にまつわる話など、時代の様相も示している作品です。

次回予定 二〇二三年十一月十日(金)午後一時半~三時半

・「鉦の音はチンカラリン」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943.12)  
・「けんかの後」(『赤い鳥』1933.4)